

『文系と理系はなぜ分かれたのか』

隠岐さや香

星海社新書／2020年12月／1,078円（税込）

多くの高等学校では、高校2年生になると文理選択を迫られることになる。これは将来のキャリアにもつながる大きな選択である。しかし一方で、世界の諸課題解決のためにさまざまな学際的な学問が生まれてきているのも事実である。学校現場では「文系か理系か選びなさい」と指導しつつも、現実社会では学際化が進み、大学の学部名を見ても文系理系の区別がつかないものも多い。この一見矛盾ともとらえられる状況に対し、本書は中世ヨーロッパにおける学問観からはじまり、産業界の文系理系の見方やジェンダーなどの視点から、文系理系のとらえ方の違いについて言及している。人間が取り扱う情報量が多くなればなるほど、文系理系の区別をすることが難しい状況が生まれてくるであろう。

本書は、社会科学を教える立場である人々に対し、科学的知識の重要性とともに社会科学や人文科学にどのように向き合い、今後の不確実な社会にアプローチしていくか示唆を与えてくれる。

『ファクトで読む米中新冷戦とアフター・コロナ』

近藤大介

講談社現代新書／2021年1月／990円（税込）

「新冷戦」とも呼ばれる米中二大国の対立の過去・現在・未来を、最新の情報を基礎にして俯瞰する。また、その狭間に位置する日本が取るべき針路を安全保障・経済・政治などの側面から分析すると共に、韓国・台湾などとの関係についても深く掘り下げて考察を加えている。20世紀的価値観に拘泥しては現在の世界を正しく理解することは不可能であり、まずは大きく変わった現実を真摯に見つめることの重要性を改めて気付かせてくれる好著である。

『続 学校に行きたくない君へ』

NPO 法人全国不登校新聞社

ポプラ社／2020年7月／1,540円（税込）

不登校の当事者たちが単純に話を聴きたい各界の著名人に直接インタビューしたものをまとめた1冊。副題「大先輩たちが語る生き方のヒント。」にある通り、珠玉の言葉が詰まっていて一読に値する。2018年発行の『学校に行きたくない君へ』の続編。

『幣原喜重郎』

熊本史雄

中公新書／2021年4月／968円（税込）

著者の熊本氏は幣原外交を、それ以前の外交政策の延長線上として捉え、幣原に独特のものではないという立場をとる。戦争を避け国際協調を図るのは幣原に限ったことではない。国際連盟には期待せず、従来の二国間外交を重んじていたことも、幣原以前を引き継ぐものと言える。幣原は外務次官であったときはリーダーシップを発揮できていたが、外相としては発揮できなかった。その理由として外相の時期には事実上の決裁が外相・次官から局長・課長級になっていたことを挙げる。ただ、その局長・課長の者たちと幣原とでは対満蒙観が共通していたので、あえて彼らに反対しなかったせいでもある。その対満蒙観は「満蒙は日本の特殊権益」というものであった。従来から指摘されていたことだが、幣原の評伝を通すと、それがよくわかる。

評伝の面白さは人間関係と心情だと思う。本書は一般向けを意識してか、心情描写が時折現れる。高校生は、その人はその時どんな気持ちだったのかを知りたいが、その回答はとても難しい。この本が、高校生の疑問への回答の手掛かりとなるだろう。

『校則、授業を変える生徒たち 開かれた学校づくりの実践と研究』

浦野東洋一ら編

同時代社／2021年3月／2,750円（税込）

こう毎日が忙しいと、提出書類に追われ、生徒への対応で追われ、「こなす」日々になりがちだ。でも一方で、教員だけでなく、保護者や生徒の代表も参加して学校運営がもし行われたら、学校はどう変化するだろうか、と夢想してみたくもなる。

ところが、そんな夢のような学校が、日本のあちこちに存在していた。この本では、その実践の紹介と理論化が試みられている。そして幾つもの論稿の中にフランスの例もある。フランスでは、学校の予算、教育計画、校則から懲戒に至るまで、高校生の代表が意思表示できる制度があるという。

日本政府も批准した子どもの権利条約では、「意見表明権」が規定されているが、しかし現実とは…と諦めかかっていた。ところが、最近日本でも「ブラック校則」などが問題にされてきた。時代は変わるかもしれない。そんな状況下、時宜に合った出版ではないだろうか。まず知るところから始めてみよう。